

3歳未満児の集団保育に関する

今日的課題への一考察

0歳児保育の時代背景と実践の発展過程の分析から

(兼田 文 ・ 日本児童教育専門学校・お茶の水女子大学大学院研究生)

はじめに

3歳未満児の集団保育の需要は、もうその是非論をこえた高まりをみせ、保育の内容の「質」そのものが問われる時代へと社会は変化している。現代は「個」の時代とも言われるほど、大人であっても子どもであっても、世間、家族等とのかかわりが、脆弱になってきている。

わが国では、経済的には豊かになりつつも子どもから自然や遊びが失われ、早期からの教育に駆り立てられていることも否めない。

人間が生活（生きていく）していくためには「集団」と「個」の両者が不可欠である。しかしマスコミで毎日のようにとりあげている乳児の虐待、少年犯罪の低年齢化など、親自身が、子育ての仕方が分からないという事実も、指摘されている。親たちも孤立して子育てをすること余儀なくされている。

このような現代において、「集団」と「個」について再検討し、「集団」の中でどのように「個（自分）」を形成していくのか、「集団の中での自分づくり」という視点から、乳児期からの自分づくりの基盤がどうあるべきであるのか、考えてみたい。

1.目的

本考察では、3歳未満児の集団保育が、どのような時代背景とともに、変化していったのか乳児保育の特徴を捉えてみたいと考える。

とりわけ0歳児に関してとりあげようと考えたのは、保育ママ制度などが見直されつつハンガリー・フィンランド等、東欧や北欧でも0歳児保育があまりみられなくなっており¹⁾、そのような中で日本独特のものとなっている傾向がある。

しかし、実際には行政の効率化から無認可保育施設の拡大や、保育に携わる者の非常勤化が多く、「保育の質」という視点が抜けている現状がある。また子育て事情の氾濫する現在では、先にも述べたが子育ての仕方が分からない親も増えており、過干渉・虐待等の切迫した問題もある。

そこで、「集団の中の自分づくり（自分づくりの土台）」がニーズの高まる0歳児保育において、どのような変遷をたどり今日に至っているかを明らかにし、親そして子どもが共に育ちあっていく「保育の質」を考慮した集団保育がどうあるべきか、考察することを目的とする。

1)「保育の質」の探求 金田 利子他
ミネルヴァ書房（2000）

2.方法

3歳未満児の集団保育の発展過程について「日本保育学会誌第1回から第53回」までの乳児保育に関する研究を、千羽氏の「展望2」をもとにしながら、もう一度振り返ってみる。そこから、0歳児から集団の中で育っていく子どもたちそして親自身の、より良い「保育の質」についての課題を見出すことができると考える。

3.結果

高度成長期以後を概観してみると、当時のごく初期には、「家庭か集団か」というどちらか一方を是とする同質論が中心であり、その根拠にはボウルビィの「継続性・一貫性の法則」があった。学会誌からはマザリングの研究など母子関係論が、0歳児保育の根底にあり、「乳児期における母親からの分離体験は累積的に影響を及ぼし、分離体験皆無がもっとも安心な状態である」(Bowlby,1975)とされ、母親が愛着理論の中核とされていた。

4.考察

先回の発表で、M・ルイスの「社会的ネットワーク理論」をとりあげたが、Howesも母親以外の人物で愛着対象者となりうるものの基準として①身体的・情緒的ケアをしていること、②子どもの生活の中における存在として持続性・一貫性があること、③子どもに対して情緒的な投資していることの3点をあげている」(Howes,1999)

日本でも保育者はこれらの基準を満たす愛着対象者となっておりこのことは保育者との関係との質が、子どもと他者との関係を発達させることにおいて重要であると考えられる。

最近では言葉の遅れが多い子どもが増え

ているといわれているが他者から刺激を受けるという発達面からも積極的な側面がみられる。また、子育てのわからない親たちには自分の子育てをつかむことができるという利点がある。日本の場合根強い性別役割分業意識がある。そのため、ただ物理的に存在しているだけで、子育てにはほとんどかかわらない父親と子どもに関係がつくられているかという疑問もある。少子化の進む現在、母子密着の育児になり育児ストレスが虐待につながるケースもある。また子ども自身も自立できないでいるのも事実である。

今日の課題として、0歳児保育に関してはまだ保育者の間でも揺れ動く側面があるという。ただ、集団の中でぼつりとしていくことが良いのではない。他者(友達)の中で、自分のペースをつくっていく自分らしさの形成すなわち「他者をくぐった自分づくり」で子どもが発達していくうえで、人格の一貫性につながっていくのではないかと考える。

参考文献

- 「保育学研究第38回第1回 2000年」
- 展望0・1・2歳保育 千羽 喜代子
- 「日本保育学会発表論文集第1回～第53回」
- 「保育の質」の探求 金田 利子他
- ミネルヴァ書房(2000)
- 「育ちあう乳幼児心理学」心理科学研究会編有斐閣(2000)
- 「発達62」特集②乳児保育の質的向上を目指して 1995
- ミネルヴァ書房
- 「発達50」特集変わる社会変わる保育
- ミネルヴァ書房(1992)
- 「発達57」特集1母親の役割 ミネルヴァ書房(1994)
- 「保育の研究第13号」特集/乳児保育の今日的課題 保育研究所